



精神医療従事者の決意の書

「精神科リハビリテーション」

江 副 勉 監修

渴望していた本がやっと世に出た思いである。精神症状を持った患者は、その症状とのたたかい、個性をはぎ取られる病院組織とのジレンマ、厚い壁で扉を閉ざす家庭、職場そして社会への弱い反抗にいつしか年月を院内生活で過ごすのが多かった。社会復帰病棟と呼ばれるのはほんの一部の病棟に限られ、全般的にみれば院内水準に適応させられ、できていることの継続を求められる、あくまでも患者としての存在しか認められない集団であった。

リハビリテーションは形ではない。どのように表面的に職員が活動を持込んで、そこから個人としての（障害、または癖を持つ）存在を生かすことができないのである。理念こそ最も重要な部分であり、精神科リハビリテーションの真髄である。

Ⅱ／総論 3. 精神科リハビリテーションの壁——院内・院外・地域の問題点と展望の中に、‘われわれは伝統的病院中心主義を脱し、リハビリテーションの理念を病院の内外で具体化していかなければならないまさに歴史的正当性を手中に握っているのである’と書いてある。これは、現代に息づく障害をもつ人を、人間として受け入れ、社会人の機能を再び動かそうとする精神医療従事者の決意として述べられたものと思う。新しく就職する職員も、ベテランの域に

達した職員も一度は必ず目を通して貰いたい章である。そうして安直に‘社会復帰’と和訳されることの重大な誤りに気づいていただきたい。

リハビリテーションは放物線を描くともいえよう。それは生活していた家庭や学校、職場から症状の発現や悪化によって、ある時期を通院やまたは入院によって離脱しても、再び生活していた場へ戻そうとするからである。もしも一直線に院内治療に始まり、そのまま定着するようなことになれば、従来の医療と何ら変わらぬことになる。

この著書は現在の精神医療のベストメンバーによって書かれている。それはどの章を読んでも理念に基づく確固とした具体的治療を正しい方向で進めているからであり、特に症例によって実証されているので、感銘を受ける。

Ⅲ／病院内のリハビリテーションでは6症院の著者が、デイとナイト・ホスピタルの運営や、家族会の組織内容を手に取るように詳細に述べている。

ついで、Ⅳ／企業におけるリハビリテーションには、患者から生産的社会的人間への脱皮後の諸問題について書かれており、復職判定の仕組みや健康管理、再発防止の方法についても親切にきめこまかに書いてある。そして偏見については、‘精神科にかかってい

ること’が糖尿病のひとがインシュリンを洋射して健康を保つことと変わらないし、患者が疎外されることに対して、これを治療的に打破してゆく働きかけを職員が主体的にすべき、といている。真に的をえたことと思う。

V／地域におけるリハビリテーションには組織論、家族の問題、患者クラブ、地域精神衛生センター、精神科診療所の立場から、などが含まれていて、リハビリテーションの仕上げの内容が広範に説明してある。

精神医療従事者で壁につき当たった人には、必ず新しい突破口を見つける糸口を知らせ、施設病防止を考える人には、何をなすべきかを教える、発展のためのよきガイドブックとなるものである。この本を必要とする人は、精神科リハビリテーションに関連するすべての職種はもちろんのこと職場や家庭で障害者に接する人、そして日本の精神医療を制度の面から支える人への、心を豊かにし、積極的エネルギーを湧かせる秀れた書であるので、ぜひ一読をすすめたと思う。

(A4版、512ページ、7500円、医歯薬出版) (元リハビリテーション学院 鈴木 明子)